

## 特定外来種ガビチョウが高山帯へ生息域を広げている可能性を初めて確認しました

長野県環境保全研究所、筑波大学及び山梨県富士山科学研究所による研究グループが、日本国内で分布を拡大し続けている特定外来種ガビチョウを国内で初めて高山帯で確認しました。本成果は12月15日付けで学術誌 *Bird Research* に掲載されました。

### 【研究の概要】

- 外来種は、捕食や競合等を通じ在来生物に様々な悪影響を与えるため、新たな地域への侵入を早期にとらえ、対策を講じることは在来生態系保全の観点からも重要です。
- ガビチョウ (*Garrulax canorus*) はチメドリ科の鳥類で、2005年に環境省により特定外来生物に指定され、日本生態学会が定めた特に生態系や人間活動への影響が大きい日本の侵略的外来種ワースト100にも選定されています。
- ガビチョウは九州地方から低標高地を中心に東方へ分布を拡大していますが、高山帯では確認されていませんでした。
- 研究グループでは、2024年に中央アルプス国定公園の高山帯で本種のさえずりを初めて確認すると同時に、中央アルプスの亜高山帯の複数箇所でもガビチョウのさえずりを確認しました。長野県環境保全研究所もこの研究に参画しており、中央アルプス地域での本種の確認調査を実施しました。

### 【研究の意義】

本種は資源をめぐる競争や卵の捕食を通して在来の鳥類に悪影響を与える可能性があります。今回の研究はガビチョウが繁殖期に高山帯を利用はじめたことを示唆しています。高山帯への外来鳥類の侵入は国内でも例がないため、本種の高山帯における定着状況や在来種への影響を把握するための基礎情報として活用されることが期待されます。

※掲載論文リンク

URL : <https://doi.org/10.11211/birdresearch.21.S6>

※詳細は、別紙（共同プレスリリース資料）をご覧ください。



ガビチョウ（写真は茨城県内で撮影）



ガビチョウが確認された中央アルプス高山帯



(問合せ先)

環境保全研究所自然環境部（飯綱庁舎）

浜田、小林（篤）

T E L 026-239-1031（代表）

F A X 026-239-2929

E-mail [kanken-shizen@pref.nagano.lg.jp](mailto:kanken-shizen@pref.nagano.lg.jp)

(問合せ先)

環境部環境政策課企画経理係 山本、塩沢

T E L 026-235-7169（直通）

026-235-7171（代表）内線 2720

F A X 026-235-7491

E-mail [kankyo@pref.nagano.lg.jp](mailto:kankyo@pref.nagano.lg.jp)

2025年12月15日

報道関係者各位

国立大学法人筑波大学  
山梨県富士山科学研究所  
長野県環境保全研究所

## 特定外来種ガビチョウのさえずりを高山帯で初めて記録

日本で分布を拡大させ続けている特定外来種のガビチョウのさえずりを、中央アルプス木曽駒ヶ岳の高山帯（標高約2770m）で初記録しました。さえずりは、繁殖期の雄が、なわばり主張や雌へのアピールとして発する鳴き声です。ガビチョウの繁殖域が低地から高山帯へと拡大している恐れがあります。

ガビチョウは本来、中国南部から東南アジアにかけたユーラシア大陸の東岸に分布する鳥類です。日本では1980年代に北九州市で野外記録が得られて以降、各地で分布を広げ、生態系などに影響を及ぼす恐れがあるとして、2024年に特定外来生物に指定されました。

これまで、国内では低地を中心に分布を拡大していましたが、近年は山間部にも進出していることが報告されていました。しかし、森林限界より標高が高い高山帯での記録はありませんでした。

本研究チームのメンバーは2024年8月6日、中央アルプスの木曽駒ヶ岳の高山帯（標高2770m）のハイマツ低木林において、さえずっているガビチョウを発見し、動画撮影しました。さらに、同年9月10日には中央アルプス駒ヶ岳ロープウェイのしらび平駅北側の森林（標高約1700m）で、同年10月18日には中央アルプス南部の池山小屋周辺の森林（標高約1750m）で、それぞれガビチョウのさえずりを確認しました。

これまで、積雪の多い場所や積雪と関連する高標高域はガビチョウの分布域として不適だと考えられていましたが、近年は国内で、夏に山地で繁殖し、冬には積雪の少ない場所に移動する生態を示す個体が出現していることが先行研究で示されていました。

本研究は、そのような季節的な標高移動を行うガビチョウが、繁殖期に高山帯を利用し始めたことを示唆しています。さえずりは一般的に、繁殖期に雄がなわばりを主張し、また雌に対するアピールとして雄によって発せられる鳴き声だからです。高山帯や亜高山帯で継続的なモニタリングを実施し、ガビチョウの定着が在来の高山性鳥類に与える影響を早急に解明することが必要です。

### 研究代表者

筑波大学生命環境系

飯島 大智 助教

山梨県富士山科学研究所研究部自然環境・共生研究科

水村 春香 研究員

長野県環境保全研究所自然環境部

小林 篤 技師



## 研究の背景

ガビチョウ *Garrulax canorus* (図1) は、中国南部から東南アジアにかけたユーラシア大陸の東岸に分布するソウシチョウ科の鳥類です。日本には江戸時代より飼い鳥として持ち込まれていましたが、1980年代に北九州市で野外記録が得られて以降、各地に分布を広げています。2004年には特定外来生物<sup>注1)</sup>に指定され、日本生態学会の「日本の侵略的外来種ワースト100」にも選ばれています。これまでの記録から、1990年代に東日本で急速に分布を拡大し、1990年代から2000年代にかけて群馬県や長野県に分布を拡大したと考えられています。日本国内においては、平地から山地の標高1000m以下によく茂った森林の下層で藪が多い環境を好み、積雪の多い場所や積雪と関連する高標高域は生息域として不適だと考えられていました。しかし近年、夏は山地で繁殖し、冬には積雪の少ない低地に移動する個体が出現し、積雪の多い山岳域をガビチョウが繁殖期に利用していることが示唆されていました（植田・植村2021<sup>1)</sup>）。

## 研究内容と成果

長野県の木曽駒ヶ岳の高山帯で2024年5月から8月に鳥類群集の把握を目的とした野外調査を実施しました。その最中の2024年8月6日に、中央アルプス駒ヶ岳ロープウェイの千畳敷駅から極楽平に向かう登山道沿いのハイマツ林（標高約2,770m, 図2）で、ガビチョウのさえずりを発見し、スマートフォンの動画機能で記録しました。記録した音声からスペクトログラム（図3）を作成し、東京都や山梨県で記録されたガビチョウの音声からスペクトログラムを作成し比較したところ、特徴が類似していました。以上のスペクトログラムの比較によって、記録された鳴き声がガビチョウであることを客観的に確認できました。さらに、調査期間外においても、同年9月10日に中央アルプス駒ヶ岳ロープウェイのしらび平駅の北側に位置する森林（標高約1,700m）で、同年10月18日には中央アルプス南部の池山小屋周辺の森林（標高約1,750m）で、それぞれガビチョウのさえずりを確認しました。

以上の成果は、中央アルプスの亜高山帯にガビチョウが広く分布しており、さらに、これまで記録がなかった高山帯にもガビチョウが進出しつつあることを示唆しています。木曽駒ヶ岳周辺におけるガビチョウの記録を整理すると、木曽駒ヶ岳の東部に位置する伊那地域で2009年に記録され、それ以降、同市内における分布が拡大していることが先行研究で示されていました（荒瀬2014<sup>2)</sup>、米山2020<sup>3)</sup>）。その一方で、木曽駒ヶ岳の西側に位置する木曽郡におけるガビチョウの記録は見当たらないため、今回高山帯で観察されたガビチョウは、山岳の東側にひろがる伊那地域から木曽駒ヶ岳の高山帯に分布を拡大させた可能性があります。さえずりは一般的に、繁殖期になわばりを主張し、また雌に対するアピールとして雄によって発せられる鳴き声です。それゆえ、今回さえずりが記録されたことは、今後、高山帯でガビチョウが繁殖する可能性があることを示しています。

## 今後の展開

高山帯のハイマツ低木林では、ガビチョウと同様に藪や茂みを好む在来種のウグイスやカヤクグリが繁殖しています。先行研究では、ガビチョウが在来鳥類と餌資源を巡って競争し（川上2002<sup>4)</sup>）、在来種の卵を捕食する可能性があることも報告されています（水村2024<sup>5)</sup>）。これらの作用により在来鳥類への負の影響が生じ得るため、侵入の拡大が懸念されています。さらに、気候変動により残雪の量が減少し、ハイマツが裸出する期間が伸びれば、ガビチョウが定着する可能性は大きくなると考えられます。それゆえ今後は、高山帯におけるガビチョウの分布域の拡大を継続的にモニタリングするとともに、定着が確認された場合には、高山帯のハイマツ低木林で繁殖する在来の鳥類に対する生態学的な影響を解明する必要があります。

参考図



図1 ガビチョウ

日本国内で急速に分布を拡大しており、特定外来生物にも指定されている。茨城県にて撮影。



図2 ガビチョウが記録された木曽駒ヶ岳のハイマツ低木林

積雪や低温などの厳しい無機的環境にさらされる高山帯には高木が生育できない。日本の高山帯は、地をはうように生育するハイマツの低木林がひろがっている。今回、ガビチョウは写真中央のハイマツ低木林内でさえずりを行っていた。

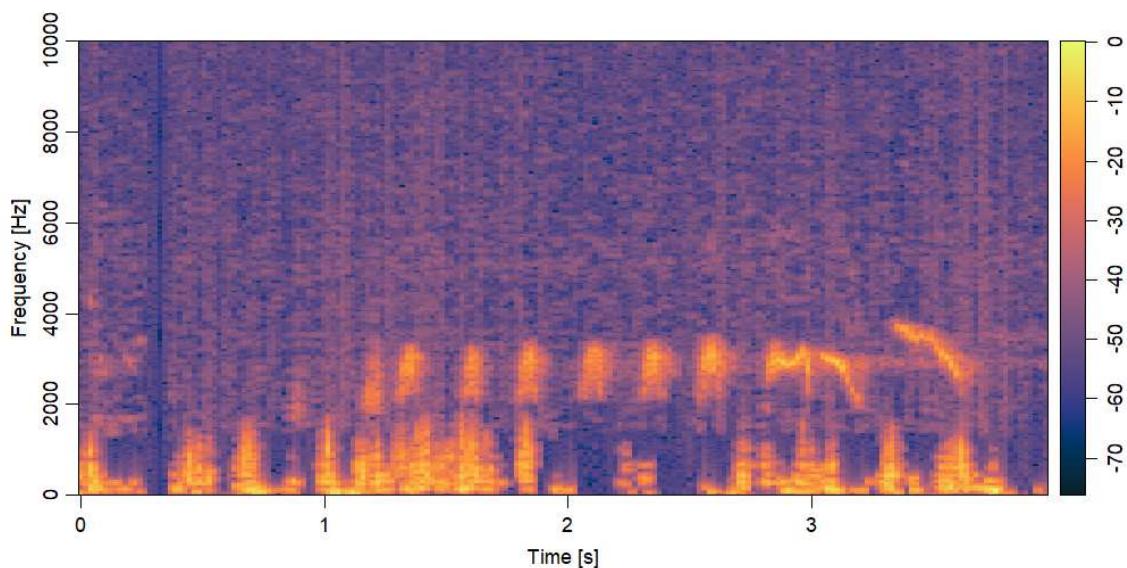


図2 録音されたガビチョウの音声のスペクトログラム

横軸は時間で縦軸が音の高さ、色が音の強さを示す。ガビチョウのさえずりの特徴が捉えられた。0–2000Hzには、同時に記録された風由来のノイズが示されている。

### 参考文献

- 1) 植田睦之, 植村慎吾 (2021) 自然保護基礎調査. 全国鳥類繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016–2021年. 鳥類繁殖分布調査会, 東京.
- 2) 荒瀬輝夫 (2014) 信州大学農学部附属 AFC 手良沢山演習林における最近 10 年間の鳥類相について. 信州大学農学部 AFC 報告 12: 107–114.
- 3) 米山富和 (2020) 伊那谷におけるガビチョウの記録. 伊那谷自然史論集 21: 49.
- 4) 川上和人 (2002) 移入種ガビチョウの野生化. 樹木医学研究 6: 27–28.
- 5) 水村春香 (2024) 特定外来生物ガビチョウによる直接的な鳥類の巣への捕食の可能性. Bird Research 20: S39–S44.

### 用語解説

- 注1) 特定外来生物 日本の外来生物法で指定される、問題を引き起こす海外起源の外来生物。生態系、人の生命・身体や農林水産業へ被害を及ぼすもの、及ぼす恐れがあるものの中から指定される。指定されると、飼養・栽培・保管・運搬・輸入・販売・譲渡・野外への放出などが原則禁止され、違反した場合は拘禁刑や罰金刑が科せられる。

### 研究資金

本研究は、科学研究費助成事業 (23KJ1792) の助成を受けて実施されました。

### 掲載論文

- 【題名】 侵略的外来種ガビチョウの高山帯におけるさえずりの記録  
 【著者名】 飯島 大智, 佐藤 臨, 水村 春香, 田谷 昌仁, 小林 篤  
 【掲載誌】 *Bird Research*  
 【掲載日】 2025年12月15日  
 【DOI】 <https://doi.org/10.11211/birdresearch.21.S6>

## 問合わせ先

### 【研究に関するここと】

飯島 大智（いいじま だいち）

筑波大学生命環境系 助教

TEL: 029-853-7075

Email: iijima.daichi.gm@u.tsukuba.ac.jp

URL: <https://trios.tsukuba.ac.jp/researcher/0000005010>

### 【取材・報道に関するここと】

筑波大学広報局

TEL: 029-853-2040

E-mail: kohositu@un.tsukuba.ac.jp

山梨県富士山科学研究所 広報・交流担当

TEL: 0555-72-6206

E-mail: kouryu@mfri.pref.yamanashi.jp

長野県環境保全研究所自然環境部（飯綱庁舎） 浜田、小林（篤）

TEL 026-239-1031（代表）

E-mail kanken-shizen@pref.nagano.lg.jp